



2021年3月1日放送

## 「第84回日本皮膚科学会東部支部学術大会 ①

### 会長講演 新時代の皮膚科学」

山梨大学大学院 皮膚科  
教授 川村 龍吉

#### 完全 WEB 方式での開催

令和2年8月22、23日に第84回日本皮膚科学会東部支部学術大会を開催致しました。当大学の主催は、2009年に現在山梨大学学長の島田眞路先生が当科教授として第73回大会を開催されて以来、11年ぶりとなりました。

当初は主会場として予定した甲府市の記念日ホテルに全国各地からご高名な先生方をお招きして、臨床的にも科学的にも活発な議論の場を提供すべく準備を進めておりました。我々学会事務局が本会の開催方式を完全WEBにするとの決定を発表したのは、昨年5月21日のことでした。当時は政府の発令した緊急事態宣言が功を奏して第1波の収束を迎える頃であり、実際5月25日に緊急事態宣言は解除されています。その様な中で、本会を現地開催にするか、WEB開催とするか、あるいはハイブリッド開催にするか、科内でも多くの議論が交わされました。最終的には、全国的な新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、日本皮膚科学会理事会から各支部総会での会食・懇親会を禁止する通達があったことや、各都道府県や各大学から外出・移動の自粛あるいは県外出張制限など様々な社会活動の自粛が要請されている状況を鑑み、また政府の新型コロナウイルス感染症対策本部の方針を踏まえ、参加者の安全を最優先に熟慮した結果、断腸の思いではありましたが、比較的早い時期に完全WEB方式での開催の発表にいたりしました。



本会は日本皮膚科学会の4つの支部総会の先陣を切って完全WEB方式での開催となりました。WEB開催の経験が全くないことから、学会プログラムの配信方法やWEB担当会社、ファイナンシャルな部分までそのほとんどを、本会に先行してWEB開催して成功裏に終わりました日本皮膚科学会総会のシステムをほぼ踏襲し、参考にさせていただきました。その意味で、模範となるWEB学会の礎を築いていただきました昨年(2020年)の第119回日本皮膚科学会総会会頭(天谷雅行)理事長にこの場をお借りして御礼申し上げます。



本会のWEB開催システムとしましては、事前に参加登録・発表データ登録を行っていただき、当日に登録発表データをビデオ・ポスター発表できるようにいたしました。また、WEB上で視聴いただいた講演や一般演題、シンポジウムの皮膚科専門医単位認定ができる仕組みも取り入れ、さらに、Live配信はもとより、総会で要望の多かったオンデマンド配信もより多く組み込みながら、アクセス集中によるサーバーのトラブルをできるだけ防ぐようにプログラム構成を工夫しました。初めてのWEB開催で当初は準備に戸惑いでしたが、セキュリティのため医師のみの限定参加とさせていただいたにもかかわらず1,200人を超える多くの先生方にご参加いただき、無事終了することができました。

### テーマ “新時代の皮膚科学”

さて、皮膚科領域では近年、生物学的製剤や低分子阻害薬などの分子標的薬による新しい皮膚疾患治療法が次々と登場し、尋常性乾癬、アトピー性皮膚炎や慢性じんましん、悪性黒色腫、感染症などの多くの疾患において目覚ましい治療成績の向上がみられます。一方、このような治療技術の進歩は、病態の解明にも大きく貢献し、様々な皮膚疾患の分子病態も凄まじい勢いで解明されつつあり、それらを駆使して治療を行う臨床医においても疾患に対するより深い理解が必要とされる時代になり、皮膚科学は今まさに新時代を迎えています。そこで、本学会のテーマは“新時代の皮膚科学”といたしました。この新時代を象徴する潮流としては大きく3つ挙げられると考えました。すなわち、一つ目は皮膚科の治療の中心がステロイドや抗がん剤から分子標的薬による免疫療法へ大きくシフトしつつあること、二つ目は分子標的薬の治療効果が逆に皮膚疾患の病態解明を推進し、これによって皮膚科の教科書やガイドラインがどんどん書き換わっていること、三つ目はAI診断・オンライン診療など新たな診察法の開発や工夫が挙げられ、これらの潮流が皮膚科学を新たな時代へ大きく変貌させつつあることを本学会で体感していただきたいと考えた次第です。

シンポジウムや教育講演では、私の専門である皮膚免疫が病態・治療に重要な役割を果たす4つの疾患群、すなわちアトピー性皮膚炎・アレルギー性皮膚疾患、皮膚がん、自己免疫性皮膚疾患、皮膚感染症それぞれの最新の分子病態・分子標的治療をエキスパートの先生方に up date していただきました。また、シンポジウムではアレルギー性疾患や自己免疫疾患の最新情報を、皮膚科に限らず幅広い領域の演者の皆様からご講演をいただきました。本学免疫学教室の中尾篤人教授には、なぜ喘息やじんましんなどのアレルギー性疾患は夜間から朝方にかけて増悪するのか？という素朴な疑問を概日リズムによる免疫反応の制御、という視点からご講演いただきました。また、明日からの日常診療にすぐに役立つような「あっと驚く日常診療のコツ」というシンポジウムも好評を博しました。

### 新型コロナウイルスに関するご講演

本会のハイライトは国立国際医療研究センター研究所長の満屋裕明先生と本学学長の島田眞路先生による、COVID-19に関する2つのライブ配信によるご講演でした。世界初のAIDS治療薬を開発し、現在も抗ウイルス薬開発分野で世界を牽引し、毎年ノーベル賞候補にも挙げられる満屋教授の特別講演は「ウイルス感染症との戦い：HIVから新型コロナウイルスへ」との題目で、ご自身が最近発見された新型コロナウイルスに対する新規治療薬（プロテアーゼ阻害薬）の開発経緯や、新型コロナウイルスに対して効果に乏しいアビガンやクロロキンに比べて満屋先生の新規治療薬が遥かに強力な抗ウイルス効果を有していること、レムデシビルとその新規治療薬を併用することによりさらに強力な感染抑制効果を発揮するデータなどをご紹介いただきました。SARS-CoV-2を「間違いなく根絶できる」との強い信念に基づくご講演は、我々を大いに奮い立たせ、強い感銘を与えてくださるものでした。また、最近マスコミでPCR検査拡充の必要性を説いておられ、“熱血学長”としても脚光を浴びておられる島田学長には「新型コロナ COVID-19の猛威-日本の奇跡は本当か-」という題目でご講演いただきました。様々なデータをもとに新型コロナウイルスに対する日本の現状を俯瞰的かつ客観的視点から“熱く”解説して頂きました。「新型コロナの制御」という今もっとも関心の高い分野の、基礎と臨床のデータに基づいた2つの講演は、両者を補完しあい、このウイルスとの戦いの現在地を明示するとともに、今後の展望を見据えた非常に意義深いものでありました。この様な講演を企画できたのは、開学以来、サイエンスに根ざした臨床を絶えず追求し、実践してきた本教室だからこそと自負するものであります。



満屋裕明先生のご講演準備風景

2つのご講演はともに聴講者数が600名を超えましたが、もし本会を現地開催としていたならば山梨県内のホテルの一室ではとても収容できない人数で、これはWEB開催の想定外のメリットの一つであると感じました。

## おわりに

冒頭にも述べました通り、本会は日本皮膚科学会の支部会としては初の完全WEB方式による学術大会でありました。様々な不安が募る中、幸いにも多数の方々にご参加頂き、WEB上のトラブルもなく盛会のうちに終了することが出来ました。ウィズコロナのスローガンのもと社会活動が大きく変貌しつつある中、本会ののちに開催された皮膚科の学会も、その多くがWEB形式で行われましたが、本会がモデルとして一つの見本となり、参考としていただけたと思っております。

最後に、本会の準備に尽力していただきました講座および運営事務局のスタッフ、並びに同門会や山梨皮膚科医会、山梨大学医学会などご支援を賜りました皆様方のお力添えに深謝申し上げます。



学会終了後日本皮膚科学会事務局にて  
島田眞路学長と